



近世城下町における祭礼の変化に関する歴史地理学研究 : 伊賀国上野および下野国烏山を事例として

著者	渡辺 康代
内容記述	この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています
発行年	2015
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102乙第2729号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00129572

論文要約

近世城下町における祭礼の変化に関する歴史地理学研究 —伊賀国上野および下野国烏山を事例として—

渡辺 康代

本論文は、伊賀国上野と下野国烏山を事例として、中近世移行期から近世末期までの両城下町における鎮守社祭礼の内容とその担い手の変化の解明を目的としたものである。当該期における城下町祭礼の内容とその担い手を通時的に論じた先行研究は少なく、それらを実証したことに大きな意義がある。

全6章からなる本論文では、鎮守社の勧請やその祭礼内容の意思決定への関与者である城主と、祭礼内容への実際の参加者である武士・町人層（具体的には、祭礼を警固する町奉行、町奉行の連絡を受ける町年寄をはじめとする城下町の重立衆、および祭礼内容の準備・実施・終了に具体的役割を持った人々）を、祭礼の「担い手」と位置づける。そして当該期における城下町の祭礼内容の変化要因について、それを担う城下町町人層との関連性において明らかにする。そのため、城主交替および城下町町人層の変化において、その緩急が対照的な伊賀国上野と下野国烏山という2事例を採り上げる。さらに、両城下町が受けた官祭の影響力の比較・検討を進めるため、和歌山の東照宮祭礼と奈良の春日若宮祭礼、江戸の天下祭における祭礼内容の変遷の解明もおこなったものである。

第1章「序論」では、城下町研究において、歴史地理学からは、戦国期から近世への為政者による城下町形態の変化の規則性が明らかにされている一方、近世城下町における都市形態の成立後におけるその変化の実態解明については研究の途上にある現状を示す。また、祭礼芸能史研究において、各地における祭礼内容に変化をもたらした諸要因の究明が指向されており、歴史学においても、町人の属性とその変化といった、城下町における町人構成の実態解明が望まれている研究の現状があることを示す。これらの先行研究にもとづき、本論文は、歴史地理学の立場から、城下町を構成した人々とその変化を導出することで、城下町形態とその変化の解明をめざすものである。そのために、鎮守社祭礼の内容決定への関与者と実際の参加者を「担い手」と位置づけ、祭礼内容とその担い手の通時的な実態解明をおこなうことで、城下町の構成員とその変化を導出するとともに、祭礼内容の変化に現れる、地域に内在する要因を明らかにするものである。

第2章「研究対象地域と研究方法」では、伊賀国上野と下野国烏山の両城下町における鎮守社勧請の時期と経緯、および祭礼記録の伝存における特徴から、両城下町祭礼の担い手や両城下町の構造的特徴を考察する。伊賀国上野においては、城下町東部の天神社に対して、城下町西部に阿拝神社をはじめとする勧請の由緒の古い神社が存在し、上野の集落的な展開が古くよりみられた。そのなかで、藤堂藩の支城となった上野の城下町の鎮守社として、東部の天神社が寛永14年（1637）、藩主によって再勧請され、以後の城下町東部の発展に寄与したことを述べる。藤堂藩では、藩の正史のなかで上野天神祭礼が記録されてきた傾向が強く、城下町祭礼における藩の関与の大きさが想定される。下野国烏山においては、牛頭天王社が戦国期に城下中央の「十文字」に勧請されて以来、町の鎮守として祀られ続けている。烏山藩では、城下町の牛頭天王祭礼の記録は町方に残されてきた傾向

が強く、城下町祭礼への町人による関わりの大きさが想定される。近世城下町の鎮守社が選定される経緯と祭礼記録の伝存のされ方は、中近世移行期から近世にかけての城下町構造の変化の大小、および城下町祭礼への藩の関与の大小を検討する指標の一つとなると指摘する。

第3章「祭礼の担い手からみた伊賀国上野城下町の社会構造とその変化」では、主に藩の正史に依拠し、上野城下町における祭礼内容の変化には、中近世移行期から17世紀前期までの「舞台芸能」と「踊り」から、17世紀半ば以降の「仮装行列」へ、さらに18世紀半ばから「人形車」が、18世紀末期以降には「楼車（だんじり）」という「車」が「仮装行列」に付加されるという、3段階の変化があったことを明らかにする。

第1は、郷士や城主が参画した「舞台芸能」と、上野に來住していた周辺の郷士層出身者や商工人層を中心とする有志で、餅搗や雨請などの「踊り」がおこなわれていた中近世移行期から17世紀前期までの段階である。

第2段階では、17世紀半ばにおいて「仮装行列」という祭礼内容に転換し、これには従前よりの有力な特定の城下町住民に限らず、近世の町人町である三筋町の町人層になるという、祭礼内容の担い手の変化が連動している。「仮装行列」は、徳川幕府が関与した官祭において17世紀前期から顕著にみられた祭礼内容であったことを、和歌山の東照宮祭礼や奈良の春日若宮祭礼、江戸の天下祭の検討を通して導出する。

さらに、上野では「仮装行列」という祭礼内容に18世紀半ばから19世紀にかけて「車」が付加されており、これを第3段階と位置づける。ただし、祭礼内容への「車」の付加は、上野では人形車や楼車を採択する町、また、これらを採択しない町があるといったように、「町」毎の判断に基づいた、「仮装行列」を主とするものであった。上野における緩やかな祭礼内容の変化には、17世紀初期に近世城下町が成立して以降、三筋町に家格ある元郷士の重立が集まり、彼らが中心的役割を果たし続けてきたことが関わりと指摘する。上野城下町における町人層の不変性の中でも、18世紀半ばより、枝町町人の補助的な参加が認められるようになるなど、祭礼の担い手のあり方に調整が加えられる。三筋町に來住した、芋紬や木綿、古手などを扱った枝町の新興商人を交えて当番制で祭礼入用金を納付し、多くの曳き手によって巡行されていたのが18世紀末期よりの楼車という「車」であったことを明らかにする。

第4章「下野国烏山城下町における祭礼内容とその担い手の変化」では、「赤坂町祭礼記録」等の町方史料に依拠し、烏山城下町の祭礼内容には、「舞台芸能」がおこなわれていた中近世移行期の段階から、「仮装行列」が採択された17世紀半ばの段階へ、そして、「仕掛芝居屋台」に転換された17世紀後期以降へという3段階の変化がみられたことを明らかにする。

まず、操り・相撲・神楽・獅子・嶋原などの「舞台芸能」が祭礼内容の中心であり、元武士の重立によって参画され、社前において奉納されてきた、中近世移行期から17世紀前期までの牛頭天王祭礼を第1段階と位置づける。

次に、「仮装行列」という祭礼内容を、「町」を単位に町屋敷の各戸主が担う祭礼組織が整えられた17世紀半ばを第2段階と位置づける。

続いて、17世紀後期から18世紀初頭という短期間のうちに、烏山の町人町の全5町が祭礼内容を「仮装行列」から、さらに多くの人手と人材が欠かせない「仕掛芝居屋台」へ

と転換させており、18世紀初頭には祭礼内容はすでに「仕掛芝居屋台」に切り替えられていた。これを第3段階と位置づける。烏山では元武士の重立が突出するのではなく、他国有力商人らが来住の都度、町の要職に抜擢されるなど、城下町における町人層は17世紀後期から変化しており、烏山は、17世紀末期にはすでに他国出身者のほか、江戸商人や、周辺村出身の多くの店借人や雇人などの町外者を抱え、紙・楮・煙草問屋が集まる町場となっていたことを明らかにする。17世紀後期から18世紀初頭における「仮装行列」から「仕掛芝居屋台」へという迅速かつ明確な祭礼内容の変化は、烏山城下町を構成した町人層の変化と連動していたことを指摘する。

第5章「近世城下町における祭礼変化とその地域的差異」では、江戸の天下祭を概観した後、伊賀国上野と下野国烏山の両城下町における祭礼変化を比較する。

両城下町においてともにみられた、中近世移行期から17世紀前期にかけておこなわれていた、郷土や元武士ら重立を主な担い手とする「舞台芸能」などから、「町」を単位に城内入りし、町屋敷の戸主が担い手となった「仮装行列」という祭礼内容への変化を、第1回目の画期と位置づける。江戸の山王祭を手本として、藤堂藩の津城下町では、藩の奨励と援助により城内入りする「仮装行列」という祭礼内容が17世紀前期より準備・実施されており、このような城下町祭礼内容の広まりを指摘する。藤堂藩内においても、津と上野では「仮装行列」の採択時期が異なるため、「仮装行列」とその担い手としての各町町人の出現は、藩による意思決定とともに、近世城下町における町人町の確立期を示す一指標であることを明らかにする。上野と烏山の両城下町祭礼の内容とその担い手の変化を指標にすると、17世紀半ばにおける、戦国期城下町から近世城下町への再編・整理、「町」における町家戸数、町人人口の充実を見出せる。当該期を、上野および烏山において近世城下町の町人町の実質的な枠組みが確立された時期と位置づける。藩主の国替えが相次いだ烏山においては、在藩期間が長かった藩主堀氏の時代に近世城下町への整備がおこなわれ、合わせて祭礼内容の変化がみられた。藩による近世城下町の整備とそれを象徴する祭礼内容の採択が、17世紀半ば頃にみられていたものと判断される。

上野および烏山の両城下町においては、ともに「車」の付加という祭礼内容への変化がみられたが、「車」を伴う祭礼内容への転換は、上野が18世紀半ば以降、烏山が17世紀後期以降と、その開始期に明確な遅速がある。

祭礼内容に付加された「車」が、藤堂藩の津城下町においては人形屋台であったのに対し、同藩の上野においては、人形車とともに18世紀末期以降には京型の楼車がみられた。一方、烏山においては、江戸の天下祭では享保6年（1721）に禁止となった人の所作を伴う屋台を、町人等が復興させ、「仕掛芝居屋台」の興行に一本化されていたことを指摘する。これらから、第2回目の画期である「車」を伴う祭礼内容への変化は、城主以上に、城下町町人層の意思決定が反映された結果であったことを解明する。

上野における祭礼内容への「車」の付加には、18世紀半ばに人形車が、18世紀末期以降に楼車の採択がみられた。江戸において、人の所作を伴った屋台が享保6年（1721）に禁止されて、人形を中心としたものに変更させられていたことを考量すると、いかなる「車」が採択されていたのかは、城下町町人の意思を図る指標となり得る。上野町人は18世紀半ば、「仮装行列」を残した上で人形車を出していたことから、江戸の祭礼文化に則した「車」を付加させていたことを指摘する。また、18世紀末期以降に採択された楼車は、

本町筋と二之町筋のみにおいて曳行されたものであり、本町筋・二之町筋の町々でも、楼車への全面的な切り替えはなく、従前よりの「仮装行列」や人形車に加えて曳行されていた。三之町筋の町々は基本的に「仮装行列」を継続させた。また、上野では18世紀半ばから枝町町人の参加が新たに認められるようになったが、上野天神祭礼に旗や幟をもって供奉するという程度にとどまり、あくまでも郷土などの系譜を引く三筋町の町人が中心的な担い手となる祭礼組織に変更はなかった。上野におけるこのような緩やかな祭礼内容の変化は、17世紀初期に町人町として定められた三筋町町人を中心とする祭礼の担い手のあり方が相対的に保たれ、町政・経済・文化において三筋町町人が指導的立場を維持してきたことと関わる。ただし、18世紀半ばより、補助的ではあったが祭礼の担い手として枝町町人が加わることが認可されており、この頃より枝町から三筋町へ移住する新興商人が認められ、在郷・枝町から三筋町へ来住した新興商人による楼車曳行への貢献が少なくなかったことが判明する。

一方、烏山では、17世紀後期以降より、町人町の全5町が「仮装行列」から「仕掛芝居屋台」へと祭礼内容を転換させており、18世紀初頭には「仕掛芝居屋台」にすでに一本化されていた。烏山では「仮装行列」を内容とした祭礼の全盛期は、実質的には17世紀半ばのうちに終了していた。「仕掛芝居屋台」をおこなうためには、舞台背景の組み立て・解体、演技の指南、役者、伴奏などに、多くの人手と人脈が欠かせなかった。烏山では、城下町構成員のなかで元武士の重立が突出するのではなく、他国有力商人の移住の都度、彼らを町政に重用するなど、その町人構成において17世紀後期からすでに変化が現れていた。烏山は17世紀末には他国出身者や江戸商人、周辺村出身の多くの店借人や雇人などの町外者を抱え、市が立ち、紙・楮・煙草問屋が集まる町場となっていた。「仕掛芝居屋台」は、江戸商人、店借人や雇人、紙・楮・煙草などの商品作物生産地域の人々などの多くの町外者ととともに楽しみを分かち合うことのできる祭礼内容であり、烏山町人は、町外者の増加に鑑み、多くの町外者が担い手となる祭礼内容を選択しており、その決意が「赤坂町祭礼記録」の末尾に記されている。17世紀後期以降の城下町祭礼において、いかなる「車」が出されたのかには、事例とした両城下町における町人の意思を看取できる。そして、町外者を含むようになるなど、祭礼の担い手の変化と祭礼内容の変化との連動性が判明する。

中近世移行期から近世末期にわたる城下町の祭礼内容とその担い手を変化させていた第1回目の画期は、17世紀半ばにおける藩を中心とした意思決定であり、第2回目の画期は、17世紀後期以降の城下町町人による意思決定であったと意義づけられる。第1回目の画期である17世紀半ばにおける藩による城下町の祭礼内容とその担い手の変化は、両城下町において同時期にみられたが、第2回目の画期である17世紀後期以降の町人の意思による祭礼内容とその担い手の変化は、異なっていた。上野では、18世紀末期まで官祭に倣った「仮装行列」や人形車等の祭礼内容がおこなわれ、楼車を採り入れるという町人の意思が明確にあらわれるのは遅かった。それも、17世紀半ばに採択された「仮装行列」を残存させた上での楼車の曳行であった。一方、17世紀後期からすでに城下町町人が屋台という新たな祭礼内容を採り入れていた烏山では、18世紀初期においては藩主大久保氏による屋台に対する諸規制を結果的に退け、「仕掛芝居屋台」という祭礼内容を続行していくことを、町人らが再確認していた。

17 世紀後期以降に城下町の祭礼内容に付加された「車」の相違と、その時期の差異には、城下町を構成する町人層の変動の大小が関わっていると考えられる。上野では、元郷士らを中心とする町人構成が近代まで続き、その変動の幅は相対的に小さかった。烏山では、城下町を構成する町人層は、18 世紀にはすでに他国よりの来住者や江戸商人、周辺村出身の店借人や雇人など、多くの町外者を含めたものになっており、町人層の変動は大きかった。

第 6 章「結論」では、伊賀国上野および下野国烏山の両城下町における第 1 回目の画期である、「仮装行列」型の祭礼内容が出現した 17 世紀半ばは、藩の主導による近世城下町における町人町の確立期を示し、第 2 回目の画期である「車」の付加という祭礼内容の変化は、両城下町における町人層の変化の大きさに応じて、地域的差異をもって出現していたと結論づける。祭礼内容およびその担い手の変化のあり方を基準にして、今後、他の城下町祭礼を検討すると、従来は見えにくかった戦国期城下町から近世城下町への町人層の転換の度合いやその時期、近世城下町の成立後における町人層の変化、それらの地域による差異とその要因などの歴史地理学的課題について、さらに解明できることを提示する。